【研究課題】
行政解剖例における冠状動脈硬化性病変の病理組織学的検討

研究期間：２０１６年９月２１日～２０２１年３月３１日

この研究では、心臓死が疑われた症例の冠状動脈の全長を詳細に検索し、病理組織学的特徴の調査をするとともに、血管内イメージング画像との所見の比較を行った。研究期間中に 94 例の検索を行い、91 例で画像撮影を行った。その結果、25 例で冠状動脈内に血栓を認め、その原因のほとんど(22 例)が粥腫破綻であった。臨床的には、急性冠症候群の原因の 20～30%はプラークびらんと言われているが、本研究ではわずかに 1 例のみ(4%)であった。突然死症例と臨床例での違いがあるのかは、今後、症例数を増やして、検討する必要がある。血管内イメージング画像の撮影にはカテーテルの挿入が必要だが、ホルマリン固定後の臓器では、血管内の血液も固定され、カテーテルが通過できず、撮影することが困難な症例が多く、固定後臓器の検索として、血管内イメージングは有用とは言えなかった。しかし、冠状動脈内のステントは、切断することが難しいため、日常の検索時には内腔を確認することが十分できないが、血管内イメージングでは、内腔の狭窄度などを評価することができ、診断の助けとなる可能性が示された。今後も心臓突然死の病態解明のため、随時、研究を行っていく。